

多文化を	ささえる	人びと
------	------	-----

# 時代のさきがけとしての 多言語放送局 FM COCOLO

一五年まえ関西を中心に放送をはじめた多言語放送FM COCOLOの試みは画期的なものであった。ターゲットを在住外国人にしばり、彼らのことばで語りはじめてきたのである。困難をかかえながらも多民族化・多言語化する社会のさきがけでもあった

庄司博史  
しよしじ ひろし  
民博 民族社会研究部

言語学・言語政策論。二〇〇四年に特別展「多みんぞくニホン」を企画。近年は移民言語や多民族化の諸現象に関心をもちている。共編著書に『多みんぞくニホン』、『ニホンの言語景観』など。

一九九五年秋、FM COCOLO (FM COLO)との遭遇はちょっとした衝撃であった。関西の、それも民放FM局が一三もの外国語を用いて放送をはじめたのである。

大阪市に日本最大の集住地をもつ

コリアンの存在は、当時から広く知られていたが、彼らのことばとして日本人が直接きくことはまれであった。まだ韓流ブームのはじまる前である。そこに一般の人びとにはほとんどなじみのないポルトガル語やヒンディー語が公共の電波を通して流れはじめたのである。

当初、番組は対象国ごとに放送時間がわりあてられ、母国話者のDJたちが、本国のニュースや日本の生活情報を日々伝えていた。わたしには通勤の車のなかで曜日ごとにかわるさまざまなことばの放送を聞くのがたのしみになった。ことばの中身がわかっていたわけではない。母語アナウンサーが故郷の音楽とともに

関西在住の仲間に直接語りかける口調は、いかにも多言語社会の到来を予感させるようで聞いていて心地よかつたのである。

## ふたつの役割

開局が阪神大震災のあった年であることから、情報不足で苦境にあった外国人住民への救済策として設置されたものとはしばしば誤解されるが、震災以前から企画は進んでいた。増加する外国人住民とともに、観光やビジネスで日本に滞在する外国人への情報提供という使命もあった。

とはいえ、FM COCOLOは、開局とともに非常時下での多言語情報サービスという役割を偶然に経験することになった。まだ地震後の混乱のなかで戸惑いと不安のなかにあった外国人に、故郷やことばを共有する人びとの存在を感じさせる意味でも大きな安らぎを与えたはずだ。

当時のFM COCOLOには、多言

## パーソナリティー・松尾カニタさん

古くからのCOCOLORISナーなら、松尾カニタさん知らない人はまずいない。すくなくとも彼女のなめらかで、ちよつと鼻にかかった日本語には聞きおぼえがあるはずだ。

多言語放送の理念に賛同し番組制作にかかわり、みずからも母語であるタイ語放送のDJとして情報を発信し続けてきた。タイに関連する番組に加え、現在は海外在住経験のある人びとへのインタビューで構成する日本語番組も担当している。リスナーはもちろん、インタビューされる側も彼女の話し術についてひきこまれ、

あつという間に時間がたつてしまう。

大学生として初めて日本を訪れ、

あらためて慶應義塾大学の大学院に留学して以来、約三〇年日本にくらす松尾さんの活動はじつに多彩だ。NHK第一放送の多文化情報番組のDJ、大阪府人権推進委員会委員など外国人への理解を促進する活動のほか、都市計画にも国土審議会委員などとしてかかわっている。現在はタイ観光局のHPを通じ、タイ情報を日本人に伝える仕事もまかされている。

そういう松尾さんにとって、活動の原点ともいえるFM COCOLOは切っても切れない存在であるようだ。松尾さんが欠かさず続ける担当番組

語放送が関西の国際化や活性化につながるという出資者やスポンサーの前向きな期待と支援もあった。そして、FM COCOLOはもうひとつの役割を果たした。それは多様なことばや文化的背景をもつ外国人に活躍する場を提供したことである。

それまで日本語のみで運営されていた放送メディアに、外国人が自分たちのことばで同郷者に語りかける機会はずなかつたといえる。当時、ほとんどシロウトに近かつた外国人スタッフのなかにはその後、さまざまな才能や経験を活かし、今日、他局での番組出演



\* 周波数:76.5MHz:(近畿二府四県の都市部で聴取可能)  
[http://www.cocolo.co.jp/pc/w\\_top.php](http://www.cocolo.co.jp/pc/w_top.php)

からは、情報の仲介者としての意欲がいつも感じられる。

## 多言語放送

### 先駆者としての試練

FM COCOLOは今年で開局一五周年をむかえる。不況にもかかわらず日本に在住する外国人は増え続け、いまや開局当時の一・六倍になった。日本語を学び、たとえ意思疎通に不自由しなくなつたとしても、コミュニティをささえるという点で母語の重要性はなくなるものではない。

とはいえ、民放の多言語放送局にとつて、この一五年は試練の連続でもあった。近年の大不況は民放を支えてきたスポンサーに大打撃をあたえている。さらに多言語放送局には、外国人という限られたリスナーの増減はスポンサーの数にはねかえる。

そのような事情から、外国語になじみのない日本人をリスナーとして取りこむ番組編成にある程度向かうのは避けがたいことである。言語コミュニティに向けた番組は朝と夜にふりわけられ、全体として音楽番組や日本語トークが増えることになった。外国語放送にもしばしば日本語の要約がそえられる。

とはいえ、FM COCOLOは多言語放送局という理念をおろしたわけではない。言語の数はひとつ減つたとはいえ、非常時には在日外国人に



2009年9月スマトラ島沖地震の際は、在大阪インドネシア総領事が来局し、インドネシア語で現地の被害状況や義援金の受付情報をつたえた

緊急情報を即座につたえる態勢もとのえている。むしろ、多言語放送局としての理念を維持する道を懸命に模索しているあかしであろう。

レギュラーに一二もの外国語番組をもつというのは日本の多言語FMのなかでも他を圧倒している。これは外国人スタッフの理念への共感と支援があつたからにはかならない。

一五年をふりかえつて松尾カニタさんはいう。「日本社会がかわつたところ? うーん、すくなくとも外国語への拒否感以前に比べて減つたのでは?」。FM COCOLOが時代を先取りしていたことは、確かなようだ。

松尾カニタさん。翻訳家、関西の都市・文化行政関連の委員としても活躍している



番組収録中の松尾カニタさん。現在、タイ人向けの番組(水曜朝6:30)と、海外情報番組「Heart Lines」(土曜朝7:30)を担当している

